

ジョレス・メドヴェーゼフ ロイ・メドヴェーゼフ

選集

全三巻
四分冊

解題・監修 佐々木洋 翻訳 名越陽子



ロシア革命100周年記念出版

革命以後のロシアが育んだ最高の知性

刊行によせて

数百万の無辜のソヴィエト人民を抹殺し、密告・拷問・死刑の残虐行為を極めたスターリン個人崇拜時代の三十年。しかしスターリン死後もスターリン主義的専横と圧制はつづいた。哲学・自然科学・芸術・文学などあらゆる面で公開性と批判の自由は奪われ、官僚化した党と国家機構による決定に服従させられた旧ソ連人民——これを「共産主義と評価することはけつてできない」、スターリン主義は「社会主義の真髄そのものからの本質的な離反である」という信念の下に、生化学者ジョレスと歴史家ロイの双子兄弟は自らの研究・批判論文をタイプライター原稿のまま「地下出版」し、ソ連国内で回覧する。それを読んで賛同し協力した人たちは反体制「異論派」知

識人と呼ばれた。

出版の自由はなく、検閲のあるスターリン主義圧制下で、一方のジョレスは『ルイセンコの興亡』を、他方のロイは『歴史の審判に向けて』を海外で出版した。それを理由に兄弟は国籍剥奪や自宅軟禁処分の弾圧を受け、ソ連国内では著書を公開することができなかった。

ジョレスとロイの双子兄弟の初めてのロシア語版選集が祖国ロシアで発刊されたのは、二〇〇二年から〇五年のことである。それを元に、ロシア革命百年にあたって日本語版選集をここに刊行する。

ジョレスとロイは反スターリン主義の姿勢を変え、二十世紀の今も九十一歳にして執筆活動を続けている。ソ連・ロシアの歴史研究にとって必読の書である。

歴史の審判に向けて 上下

——スターリンとスターリン主義について

ロイ・メドヴェージェフ著 上巻五四二頁・下巻四六〇頁

A5判上製 予価(本体 上・五六〇〇円、下・五〇〇〇円+税)

本書は「スターリン批判にかんする最高の、そして唯一の原典」と評した石堂清倫氏が翻訳した『共産主義とは何か』(三二書房、一九七三年)の増補改訂版である。

ソルジェニーツィン文学が『収容所群島』で描いたスターリンのソ連を、歴史学および哲学の立場から描いた戦慄と驚愕のドキュメントが織りなす壮大なスターリンとスターリン主義の研究。

同胞や多くの友人たちとの交流により、彼らの所蔵する資料や秘匿され封印されていた諸文書・手稿などに触れ、また未公開の「回想」や収容所を生き延びた元囚人の回顧や証言により、スターリンによる徹底した未曾有の密告・恐怖政治の起源と現実の過程を暴いた生々しい記録。

著者が「真実を語ることを恐れる気持ちに打ち克つこと」を自らに課し、

過酷な弾圧に曝されながら、それを

貫いていることに驚嘆の念が湧く。

タイプ稿の初版から二十年を経て、その間、アメリカのロシア研究者R・タッカーやS・コーエンらと学問的な交流を深め、トロツキー編『反対派ブレティン』などを精読して、大幅な加筆と削除、さらに書き下ろしを加えたより深化された論考となっている。



第一巻上 歴史の審判に向けて——スターリンとスターリン主義について 上

著者より

- 第一章 全連邦共産党(ボリシェヴィキ) 党首としてのスターリン
 - 第二章 スターリンの反対派との闘い
 - 第三章 農業集団化と工業化実施上におけるスターリンの誤謬と犯罪
 - 第四章 一九三〇年代初頭の国内・国外情勢の緊迫化 スターリンの新たな犯罪
 - 第五章 S・M・キエロフの暗殺。旧反対派指導者たちに対する裁判
 - 第六章 党と国家の主要カードルに対する打撃(一九三七—一九三八年)
 - 第七章 一九三九—一九四一年の復権と弾圧について
 - 第八章 審理と禁固に用いた不法な方法
- 上巻注

第一巻下 歴史の審判に向けて——スターリンとスターリン主義について 下

- 第九章 一九三七—一九三八年のテロ組織に対するスターリンの個人的責任について
- 第十章 一九三七—一九三八年の大量弾圧のいくつかの理由について
- 第十一章 スターリンの権力篡奪を容易にした諸条件について
- 第十二章 スターリンの外交的軍事的誤謬 戦時期のスターリン
- 第十三章 戦後期のスターリンの犯罪と誤謬
- 第十四章 スターリン個人崇拜がソ連の科学と文化に及ぼした結果
- 第十五章 社会主義とえせ社会主義

結論

下巻注

解題

人名索引

第二巻 ウラルの核惨事

新しい日本語版『ウラルの核惨事』への序文

- 第一章 センセーションの始まり
- 第二章 センセーションは続く
- 第三章 専門家でない人のための用語解説
- 第四章 ウラルの惨事
- 第五章 湖、水生植物、魚の放射能汚染
- 第六章 ウラルの汚染地帯における哺乳類
- 第七章 ウラルのチェリャビンスク州は放射能汚染地帯である
- 第八章 一九五七年の秋—冬はウラルの大惨事の時期である
- 第九章 放射性生物群集における鳥類と様々な国への放射能の拡散
- ウラルの放射能汚染ゾーンの土壤動物

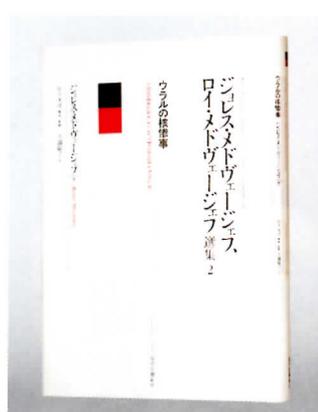
ウラルの核惨事

ジョレス・メドヴェージェフ著 一八二頁
A5判上製 定価（本体三六〇〇円＋税）

一九五七年秋、ウラル南部のチェリヤビンスク州に、極秘に建設された原子力コンビナートで起きた核事故は核廃棄物貯蔵所が爆発したものであった。しかし旧ソ連は徹底的に隠し続けた。国籍を剥奪されてロンドン在住を余儀なくされていたジョレスは、ソ連国内で検証することはできず、英国の図書館に所蔵されていた検閲後のソ連の公開資料を基礎にして、事故を推論し確定する。そしてこの事故を「ウラルの核惨事」と命名し、一九七六年に科学雑誌に発表して世界中に反響を呼んだ。ところが「放射性廃棄物が爆発することなどあり得ない」と、ソ連をはじめ英・米・仏は反論し、否定し続けた。だが、チェルノブイリ事故が起きた三年後の一九八九年に、ようやくソ連は「ウラルの核惨事」を公式に国際原子力機関 IAEA に通告したのである。

梅林宏道訳『ウラルの核惨事』（技術と人間、一九八二年）は英語版からの重訳であったのに対して本書はロシア語版からの初翻訳である。

また新たに「日本語版序文」、チェルノブイリ事故の経験をふまえてウラルの核惨事を振り返った「悲劇の前と後」、「ヨウ素」の惨事、「世界のエネルギー経済におけるチェルノブイリの要因」、そして3・11福島原発事故に寄せた論文「クイシユトウイムーチェルノブイリーフクシマ次はどこか？」をあわせて収載する増補新版である。



第三卷

生物学と個人崇拜——ルイセンコの興亡

新しい日本語版への序文

第一部 論争の第一段階（一九二九—一九四一年）

第一章 ソ連における生物学・農学論争の発生のおよびいくつかの歴史的前提

第二章 一九三五年から一九三六年の遺伝学および品種改良学における全国論争の始まり——二つの相反する品種改良・遺伝学概念の特徴

第三章 一九三七年から一九四〇年の遺伝学論争の第一段階の完成

第四章 一九三七年から一九四〇年のソヴィエト遺伝医学の運命

第五章 一九三五年から一九三八年の農学論争事件と遺伝学論争との関係

第二部 論争の新しい局面（一九四六年—一九六二年）

第一章 戦後の遺伝学論争の激化——一九四八年八月のBACXIIJ定例会議の原因と結果

第二章 一九四八年のウイリヤムス主義の復活と牧草輪作方式の国内全土への拡大

第三章 遺伝学の二つの学派——理論面

第四章 実践—真理の基準

第三部 論争の最終段階（一九六二年—一九六六年）

第一章 一九六二年七月から一九六四年十月までの生物学論争の主な出来事

第二章 ルイセンコ主義の終了——一九六四年十月から一九六六年十二月

終わりに——論争のいくつかの結論と教訓

後書き

注

解題

人名索引

人名索引

人名索引

第十章 ウラルの放射能汚染地帯の樹木

第十一章 ウラルの放射性生物群集地帯における野生植物および植物放射線遺

伝学の研究

第十二章 ウラルの放射性生物群集における集団遺伝学の研究

第十三章 ウラルの核惨事に関するアメリカ中央情報局（CIA）の文書の分析

第十四章 ウラルの核惨事の原因。一九五七—一九五八年の出来事を復元する試み

語文書

文献

悲劇の前と後

「ヨウ素」の惨事

世界のエネルギー経済におけるチェルノブイリの要因

附録 クイシユトウイムーチェルノブイリーフクシマ 次はどこか？

解題

人名索引

生物学と個人崇拜

—— ルイセンコの興亡

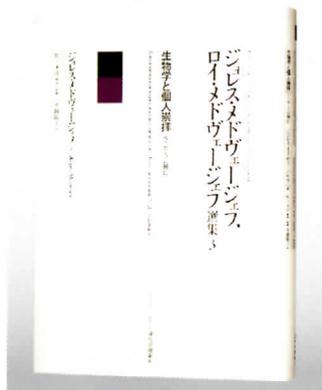
ジョレス・メドヴェージェエフ著 三八四頁
A5判上製 予価(本体四二〇〇円+税)

農業集団化の失敗から大飢饉を招いたスターリンは、乾燥や寒さに強い高収量の農業を掲げてメンデル遺伝学を拒絶する荒唐無稽な「ルイセンコ学説」を強固に支持した。学生時代にルイセンコの横暴を身を以て体験させられたジョレスは、スターリンによる科学の政治的支配とスターリン、フルシチョフに寵愛されたルイセンコの学説に抵抗する。ルイセンコ学説に従うことは生物学と農業の発展に後れを取ることではない、と。

ジョレスは、ルイセンコ学説の批判を遺伝学・農業生物学の論争史としてまとめ「生物学と個人崇拜」と題して地下出版する。のちに、タイトルを『ルイセンコの興亡』と変更された英語版が一九六九年にアメリカで出版された。ブレジネフ、スースロフはこれに激怒し、翌年そのことを理由にジョレスは精神病院に収容されたのであった。

金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』(河出書房新社、一九七一年刊)はロシア語版の三割が省略されたこの英語版からの重訳であるが、本書は省略のない

ロシア語版からのはじめての完訳である。「スターリン式自然大改造計画」における牧草式輪作農法の全面導入の問題(本書第二章)など、本邦初訳となる。また、書名はオリジナルの『生物学と個人崇拜』に



- 著者本人による増補・改訂をもりこんだ、ロシア語選集からの完全新訳!
- 第2巻と第3巻には著者による書きおろし「日本語版序文」を収録。
- 4カ月に1巻ずつ全3回配本。

現代思潮新社 〒112-0013 東京都文京区音羽 2-5-11-101

電話 03-5981-9214 FAX 03-5981-9215 order9214@gendaishicho.co.jp

予約申込書

お名前 (ふりがな)	貴店名・帖合
ご住所 (〒 —)	
電話番号	
全3巻(全4冊) [] セットを注文します。(ご希望のセット数をご記入ください)	

第2巻 ウラルの核惨事

ISBN:978-4-329-10003-0 C0330 ¥3600E 定価(本体3,600円+税) _____ 冊

第1巻 歴史の審判に向けて —— スターリンとスターリン主義について (上・下) 各

ISBN:978-4-329-10001-6、10002-3 予価上巻・本体5,600円 下巻・本体5,000円 2017年9月刊行予定 _____ 冊

第3巻 生物学と個人崇拜 —— ルイセンコの興亡

ISBN:978-4-329-10004-7 予価本体4,200円 2017年12月刊行予定 _____ 冊